

# 世界3と客観的社会存在

—カール・R・ポパーと新しい社会像の可能性2—

犬飼裕一

## 1. 社会学理論はどこで行き詰ったのか？

社会学理論は伝統的な二分法的認識論の行き詰まりによって長らく停止してしまっている。ところが、多くの人々は二分法的認識論をなんとかして維持しようとするために、本来矛盾でも何でもないことを「矛盾」と呼び、単なる混同状態を「パラドックス」であるとみなす。あるいは自分で作り出した困難を、あたかも人類や近代社会共通の深刻な運命であるかのように論じてしまう。

たとえば、「近代化のジレンマ」「合理化のパラドックス」、あるいは「進歩の矛盾」「啓蒙の野蛮化」といった言い方が、しばしば社会科学の理論で登場する。具体的な事例など上げなくても、読者の脳裏にもいくらでも思い浮かぶだろう。現にこれらの表現をそのまま表題に掲げた本もたくさんある。社会を進歩させ多くの人々を幸せにするとされた考え方が実はむしろ暴力をもたらし、人々を不幸に陥らせている。善かれと思って大勢でやったことが、実は悪夢であった。善意は実は悪意以上に有害であることすらある、等々。ここからは著者たちの文学的な才能に応じて様々な印象的レトリック（修辞法）が披露される。場合によっては、理論として何かを明らかにするというよりも、印象的で心に残る反語表現の展示会のような様相になってしまう。そして毎度同じようなことを繰り返すだけで思考停止状態になってしまう。これが最もわかりやすい行き詰まりである<sup>1)</sup>。

ただし、肝心のジレンマやパラドックスがなぜ生じているのかについては、ほとんど問われることがない。そもそもジレンマやパラドックスというのは、「二律背反」という漢語の訳語が示しているように、あるいはこれらのヨーロッパ語の語源がすでに言い表しているように（ジ〔2〕レンマや、パラ〔背反〕ドックス）、二つの命題が互いに矛盾しあうことを示して

いる。ようするに初めから矛盾して共存できないことを一緒にしたり、同一視したりすることによって生じている事態のことである。

上記の「近代化のジレンマ」や「合理化のパラドックス」といわれているものも、実は単に一緒にできないはずの問題を無理やり一緒にしているだけではないのか。実は自分たちで作り出しているだけなのではないのか。勝手に木に竹を継いでおいて、不都合だと言っているだけなのではないのか。そんな素朴な印象を長年にわたって抱いてきたことをあらためて白状しておくことにする。また、2011年の著書『方法論的個人主義』で最初にまとめて文章にしてから、やがて十年が経過しようとしている。

現に単なる素朴な印象が、具体的な問いへとつながっていくには長い時間を要した。筆者自身、互いに対立する社会科学理論の中である部分に強い共感を感じていたのは事実であるし、その立場から敵対する立場について意地悪な議論をしてきたことも事実である。ただし、それらは党派的な問題というよりも、むしろはるかに長年の疑問に基づくものであった。よりありえなさそうな立場よりは、よりましな立場を選んでその可能性をできる限り試してみようというのがその場合の模索であった。

そんな中で筆者の立場を近年大きく見直すきっかけになったのが、カール・R・ポパーの三世界論との再会であった。以前から知っていた議論ではあったが、実証主義と意味学派の議論を長く入念に観察して後に再度検討しなおすと、今までの自分の探求がまったく別のものに見えてくる。今までの自分の思考は、単に特定の前提を繰り返していただけなのではないか。ぐるぐる回ることによって特定の前提を死守しようとしていただけではないのか。特定の前提とは、西洋世界に古くから伝わってきた二分法（あれかこれか）であった。これは大きな驚きであり、驚きは新たな可能性を探そうという熱意に変わっていった。

筆者は前稿「世界3と社会学」でポパーの三世界論を手掛かりに、従来の二分法に代わる三分法、つまり世界1と世界2と世界3からなる理論的提案を行った。そして、「世界」を二つに分けようとするから矛盾やパラドックスに陥るのであり、三つに分けて考えれば矛盾でもパラドックスでもないという場合が多いことを指摘した（犬飼 2019）。

詳しい議論は前稿を参照されたいが、簡単に概略を述べると、世界1とは自然界であり、世界2とは人間の内面、そして世界3とは人間が作り出した世界である。ただ、これはあくまでも人間の視点からの分類であっ

て、三つの「世界」がそれ自体で存在する実体としてあるわけではない。例えば、自然に生えてきた立木は人間にとって世界1の存在であるが、人間が作った電柱は世界3に属する。しかし、カラスにとっては立木も電柱も世界1に属する。電柱にかけられたカラスの巣は人間にとっては世界1に属するが、カラスにとっては世界3である。ついでにいえば、カラスは巣材にしばしば針金ハンガーを用いるが、カラスにとって針金ハンガーや人間の衣類は木の枝や動物の毛と同じく世界1に属している。

しかも、三つの世界の境界は不分明な場合もありうる。流行する伝染病は通常の場合世界1に属するが、病原菌がどこかの国、あるいはテロ組織が開発した生物化学兵器だった場合は世界3に属するといわなければならない。

さらにいえば、人間の内面である世界2も完全の外界から分離できるわけではない。ぜひ専門家に生物学や生理学、医学の知見を教示してもらいたいところだが、人間の脳や神経系は世界1の存在のはずである。そんな脳や神経系に「ある」「存在する」とされる人間の内面が世界2として自立できる根拠はどこにあるのか。むしろ、筆者も含めて人々が「自己」を自立した存在であると実感できていること自体がかなり特殊な条件が関係しているはずである。要するに、意図してそう思う場合にだけ「存在」は自覚されるにすぎない。そして、人間以外の動物の自己とはどう違うのか。あるいは意識に傷害を負った場合の自己は、薬物によって影響を受けた自己は、世界2だけで自立していられるのか。障害を追って「自己」を自覚的なくなって人々にとって、自己はありえるのか。あるとしたなら、その根拠は何なのか。ざっと考え付くだけでも世界2の境界線も大いに揺らいでいることが考えられる。

議論を戻すと、学問の分類でいえば、世界1は自然科学一般の研究対象であり、世界3は人文・社会科学の対象である。最も難しいのが世界2で、心理学などの「心の科学」の対象であるが、社会心理学は世界2と世界3の相互関係を問題にする。ただし、学問についてなによりも確認しておかなければならないことは、学問自体はすべて世界3に属しているということである。どう考えてみても、学問は人間が作り出したものであり人間が作り出したものであるからこそ、人間の強い関心の対象である。つまり、世界2（人間の主観）が最大の関心を払っている。

そして、世界1と世界3は世界2を通して関係を結んでいる。それは、

決して複雑でも理解困難でもない関係でしかない。簡単にいえば、人は世界2で意図して、世界1に属する鉄鋼石や石炭を用いて、世界3に属する鉄を作っている。だから、鉄鉱石が自然に鉄になることはない。また鉄が酸化することはあるが、自然に鉄鉱石に戻ることもない。つまり、中間には世界2を介さないと、世界1と世界3はやりとりができない。理由は簡単で、三つの世界はあくまでも人間にとっての分類でしかないからである。言い換えると、人間から見ると世界が三つに分けられ、三つに分けられる原因もまた人間自身だからという循環関係になっているにすぎない。

重要なのは、世界を三つに分けて考えるという仮説によってどんなふうに見えてくるのかということであり、従来の二つに分けて考える認識論に比べてどのような利点があるのかということである。この問題もすでに前稿で論じたことなので、簡単に概略を述べると、古代以来西洋の認識論は二元論を主に展開してきた。代表的なのは主体と客体、主観と客観、人間と自然、人工と自然、他といった二分法である。これらの二分法は様々な次元を含んでいるのだが、興味深いのは何かの基準を設定しては世界を二つに分けようとする人間の思考様式である。

これに対して三世界論は、簡単にいえば自然と人工物の間に人間の内面を付け加える。それによって、従来の「主体と客体」と「主観と客観」という伝統的な二種類の二分法が犯してきた不都合な混同を避けることができる。「主体と客体」からなる二分法は、研究する主体と研究される客体に世界を二分する。この考えによると、自然物と人間が作り出した人工物は区別されない。自然科学を中心に発展した実証主義の研究方法がこれに当てはまる。

そしてもう一つの「主観と客観」からなる二分法は、人間を取り巻く世界を客観的な自然界と、人間の意志を反映した主観の世界に分けようとする。前稿では「意味学派」という言葉で呼んだ。哲学や歴史学、そして社会科学で、社会はすべて人間の主観の産物であるという考え方である。歴史も、社会も、組織も制度もすべて人々の主観が相互に作り出しているものであり、主観と客観の間に「間主観」「相互主観」といった言葉を与えて呼ぶ人々もいる<sup>2)</sup>。

実証主義と意味学派、これら二つは社会科学において、しばしば対立関係にあるとみなされてきた。実証主義は社会实在論であり、実在する社会を子細に研究すれば社会の真実が明らかになると考える。これに対して、

意味学派は社会名目論の立場を代表し、社会というのはあくまでも人々の関係であり、生じては消えていく。あるいは、人々の内面にある主観、あるいは共有され、循環する主観（相互主観）であると主張される。

实在論と名目論といえば中世の哲学を思い起こさせるが、問題の起源はそれほど古い。社会を实在と考える（あるいは实在として考えるという仮説に出発する）実証主義と社会を単なる名称（名目）と考える意味学派の思考は、存在論と関係論、客観主義と主観主義といった名称で形を変えながら繰り返し争ってきた。

社会实在論が長らく優勢で、社会科学は文字通り社会の科学として、自然科学と同じように研究するべきなのだという考え方が今日でも強い影響力を誇っている。しばしばいわれる社会科学の未熟さ、不完全さというのもこの線の話である。物理学に代表されるような科学の確実さに、今のところ社会科学は劣っているのは確かだが、いつかさらに完成度をあげて行けば、より完成度の高い社会科学が完成するという含意が含まれている。

19世紀後半からヨーロッパで盛んにおこなわれていた実証主義への批判は、自然科学の方法が人文・社会科学には適用不可能であるか、困難であるということを主張することが要点であった。つまり、自然界と人間が作り出している社会とは別の原理に基づいているという考えである。その際に強調されたのが「意味」の問題である。自然界の現象は人間の関与なく存在しており、これに対して社会の現象は人間がそれに意味づけを行うことによって成り立っている。これが意味学派の考えの根幹である。言い換えれば、意味学派にとって社会というのは、あるいは人文・社会科学の対象はすべて、人々の「意味」に基づいている。だから人々がそれに意味を見出さなければ「無意味」になってしまう。

以上簡単に実証主義と意味学派の考えについてみてきたが、対立しあう両者にも実は共通点がある。それは、両方とも二分法で考えているということである。実証主義は研究主体と研究対象、意味学派は主観と客観に二分して考えている。

これに対して、三世界論は、世界を三つに分けて考えることを提案する。三世界論の立場から考えると、実証主義は世界1と世界3を同一視しており、意味学派は世界2と世界3を同一視している。当然のことで、二分法・二元論なので、三つのうち二つを同一視しなければならないのである。

もちろん、そのことをもって実証主義と意味学派を批判する必要はないし、そんな批判は不当であり、単なる言いがかりでしかない。

ここで論じたいのは、むしろ実証主義と意味学派の議論では見えてこないか、見えにくいものが三世界論によって明白にとらえうるということである。このことはすでに前稿でも強調したことだが、機会がある限り何度強調しても強調しすぎることはないと考えている。言い換えれば、無数の人々が「社会」をめぐる多くの思考を積み重ねてきた中で、それらとは多少なりとも違う方向付けが達成できたならば、それこそが筆者の目的なのである。

ここで何よりも強調したいことは、社会科学において「客観性」を論じることができるのは、三世界論によってのみであり、また社会を世界3として論じることによってしか、客観性の問題は論理的に困難であるということである。

## 2. 客観性という古い問題

マックス・ウェーバーが論文「社会科学および社会政策の認識の「客観性」」(Weber 1904)を発表した当時、問題となっていたのは社会科学に自然科学の方法をそのまま用いることは可能なのか、あるいは正当なのかということであった。とりわけ争点となったのは、社会科学に自然科学の方法を用いる立場(実証主義)が標榜する「客観性」は本当に客観的なのかという問題であった。

ウェーバーの考えは否定的で、社会科学の研究には自然科学とは違って「意味」の問題が介在するから「客観性」は究極的には不可能であると主張した。この場合の「意味」とは社会科学の研究者が特定の社会現象を研究するに値すると考えるのはなぜなのかという問いに対する答えのことである。答えは簡単で「意味」があるからである。逆に研究するに値しないのは、「意味」がないからである。さらにいえば、自然科学の方法で社会の問題を厳密に研究することは不可能ではないが、厳密に研究すれば研究するほど「意味」がなくなっていってしまう。

たとえば、特定の会社について様々な事実を厳密に特定することはできる。財務諸表から従業員の細かな統計データまで無数の厳密な事実が特定可能である。しかし、それらはすべて過去の事実であり、また関心をひかない無意味な事実である。では「意味」のあること、ぜひ知りたいと思う

ことはなにかといえば、その会社は今後どうなるのか。儲かるのか、株価は上がるのか、その反対なのか。あるいは重大な問題を隠しているのかいないのか。困ったことに、多くの人々がぜひとも知りたいと思うことは、実は科学として厳密に特定することはできないのである。

このことは、視点を変えて、株式市場において「明日の株価」が完全に確実に言い当てられる事態を考えてみればよい。もしもそれが可能だとしたら、それは語の本来の意味での「市場」ではない。今日千円の株が数日で千五百円になることが完全に科学的にわかっていたとしたら、誰が今日千円で売るのがか。「科学」を知らない人から安く買うのか。そんな状況が生じたとしたら、それは「科学」というよりも、むしろ倫理や法の問題なのではないのか。

ようするに特定の会社について、市場や経済にかかわる多くの人々にとって「意味」があることは、科学によって特定できないからこそ市場であり、(通常の)経済であるともいえる。また、市場を廃止してすべてを「科学的な計画によって制御しようとする「経済」も、結局のところは計画不可能な要因を抱え込むようになる。市場による「価値法則」の代替として闇市場が乱立するなどというのがまさにその例である。

人間の社会は常に「意味」によって意味付けられており、人々が抱く関心によって常に動いている。ある状況の下でうまくいった経済政策が、次の機会には多くの人々によって学習されてしまい、政策の先回りが生じることによって意図とは正反対の結果を招く。誰も損したくないから、誰もが自分(たち)だけは利益を得たいと考えるから、誰もが過去から必死に学ぼうとする。このため二度と同じような効果は期待できなくなるのである。まさにこの点が、人間の社会を自然現象から大きく隔てているところである。

言い換えれば、先に述べた世界1と世界3を区別しないということは、社会現象にも自然現象と同じような法則性があると考えことであり、また人々が過去の事例に学ぶことが決してないか、あるいは学習の効果は無視できると考えることでもある。もちろん、こういう立場に無理があることはそれほど考える必要はないだろう。現に、意味学派による実証主義への批判は長年この点を出てきた。

ただし、それでは意味学派の議論が万能なのかということ、こちらも問題を抱えている。意味学派の立場、すなわち世界2と世界3を区別しない立

場は、すべての社会現象が人々の主観、つまり「意味」によって成り立っており、基本的に人々の意のままになると考えようとする。もちろん「すべては人の意のままだ」などという大胆な主張する意味学派はまれで、もう少し婉曲の表現をする。しかし、世界2と世界3を区別しないのならば、人々の主観のおもむくままに社会が変化しなければ論理的に矛盾に陥ってしまう。そうでなければ、人々の主観を超えた客観的な社会が実在するということになってしまうからである。

意味学派の議論の特徴は、むしろ人間社会にしばしば起こる矛盾、ジレンマ、パラドックスを強調することにある。本稿の冒頭に論じた「近代化のジレンマ」や「合理化のパラドックス」というのが典型で、近代化することによってより良い社会が実現するはずがそうではなかった。合理性を突き詰めていくと社会全体が合理的になるはずが深刻な不合理に陥っているというわけである。この種の議論の背後にあるのが、まさに世界2と世界3を区別しない意味学派の思考である。つまり、明言しないにせよ、人々は近代的、合理的な理想社会を主観的に願っているのだが、なぜか人々の願いは裏切られ、望ましくない状態に陥ってしまう。それらを「矛盾」と呼び、あるいは「疎外」や「弁証法」といった言葉も毎度登場する。人類は予想外の結果に直面して立ちつくし、恐れおののいているというわけである。

この種の議論は、文学的な性格が強く、そのためにしばしば感動的でもあるのだが、次第に同工異曲といった議論が増えてくる。それらは思い思いにレトリックに工夫を凝らし、神秘的な印象を帯びる半面、しばしば何を言っているのかよくわからなくなっている。しかも、何かを新たに主張しているのかといえばほとんどない。結局、昔の人間も困難だったが、現代人も楽ではない、むしろ不幸になってきたというだけのことである。

視点を変えていえば、最初から無理なことを望んでいて、結果として無理であったことを嘆いているともいえる。無理なこととは、人間が生み出した領域である世界3を世界2の世界から自由に操作しようとするのである。

世界2と世界3を分けて考える立場の根幹は、「人間の世界」を二つに分類することにある。一つは人間の内面であり、もう一つは人間の意図が作り出したものである。世界2は内面の問題なので人々の意のままになるが、世界3は手を離れているので他者との関係に晒される。他者との関係



に晒されるということは、他者の関心との間で調整を必要とするということである。自分が強い関心を抱いていることは、他者も同じように強い関心を抱いている。

そして、日ごろ強い人間関係を結んでいる他者の関心を無視することはできない。自分が関心を持ち、ぜひ重視したいと思っていることは、付き合いの深い他者も同じように考えていることなのである。

社会には強い自己言及性がある。人々が社会について考えることは、まさに自分自身のことであり、社会について何よりも強く考えることは、自分自身の利害である。それだからこそ、社会は人々の自己言及なのである。「社会」とは「自己」であり、「自己」とは「社会」なのである。

そうして人間にとっての「自我」ができあがる。自我とは他者とのやり取り、相互関係の中ではじめて形成される意識である。ただ、意味学派の議論はできあがった自我を世界に唯一無比であると考えてることによって「他者」を無視してしまった。当然のことだが、「他者」もそれぞれに唯一無比なのである。

自己は他者であり、他者は自己でもある。「自己」と「他者」の間の循環こそが、人と人との間に生じる「人間(じんかん)」<sup>3)</sup>なのである。まさにこれこそが意味学派がはじめて把握した「人間」の真実であった。ただし、意味学派はこの循環関係の重要性をあまりにも重視しすぎてしまった。

人間を取り巻く世界には、「他者」に関係することによって、循環が途切れてしまうからである。誰もが自分だけとは考えることによって、何とかして循環を断ち切ろうとする。人々が考える「個人」というのは、そんな形で循環を意図的に断ち切った状態なのだろう。

他者も含めた循環関係を恣意的に切り離して、「個人」を確保しようとするのが、まさに近代の「個人主義」とつながっていたのだろう。しかし、個々人がいくら自分だけは特別であると考えても、「他者」との関係は断ち切れない。もちろん、他の人々も同じことを考えている。そして、同じことを考えているであろう「他者」までもが、「自己」に意識される。

世界2で自覚する個人が、世界3で「個人」の存在を表明してしまうと、表明された「個人」は、世界2から離れてしまう。そして、今度は「他者」として「自己」に対面してくるのである。以前の「自己」は、次の瞬間に「他者」となってしまう、自分とは切り離されたよそよそしい存在として対面する。

そんな「自我」と「他者」からなる「個人」を、あたかも独立して普遍的な存在であるかのように考えることによって、大きな成果を上げたのが「近代（モダニティ）」や「啓蒙」と呼ばれる運動（現象）だったのだろう。近代は、啓蒙は「個人」を関係性から切り離して実体化することによって多くの人々の力を引き出した。

自分の努力はそれ自体として独立しており、努力すればするほど「自己」は拡大していく。そんな考えは多くの人々にとって励みになり、「他者」と違う独自性や独創性として意識されたのだろう。

ただし、それはあくまでも世界2の領域の問題であって、人々の意識が作り出した世界3の領域には通用しない。世界3は他者との関係性、自分の行為が他者の行為に影響を与える反照性の領域であって、個々人が自由にできるわけではないからである。

世界1の領域は技術の問題であって、技術が開発されれば人間の自由になるが、世界3は相互関係と反照性、さらには自己言及性の問題なので、人間が作り出したがゆえに人間の自由にはならない。むしろ世界3の問題は技術的には容易であることが多い。このことは世界1の問題である天然痘や癌と、世界3の問題である社会的地位の格差を考えてみればよい。

技術と相互性は、世界1と世界3の性質の根幹である。天然痘が撲滅されたのは技術が開発されたからであり、癌の治療が成果をあげつつも難しいのは技術が未完成だからである。すべての癌が治る治療法が開発されたならば、それに反対する人はいない。これに対して、社会的地位は制度や資格、資金や名声といった要因によって規定されているが、技術の問題はほぼ介在しない。現に社会の問題はごく簡単な制度変更によって激変することがあるが、激変がそれほど頻繁に起こらないのは、人々が互いの利害を監視し合っているからである。誰もが自分が生み出した生産物や人間関係を最大限の注意を払っており、少しの変更でも他者との関係を調整しなければならない。

しかも関係性は複雑化するほど、また規模が大きくなるほど操作が困難になる。数人の自発サークルならば解散も容易だが、数万人の大企業を社長の一存で解散させることはできない。解散どころか、多少の経営方針変更ですら難しいのが普通であり、いわゆる「サラリーマン社長」ならば大株主の意に添わなければすぐに「次の人」に交代させられてしまう。一企業ですら十分に複雑で、個人の意のままにすることなどできないのだから

ら、もっと漠然とした意味での「社会」を意のままにするなどということがありえないことは、いまさら強調するまでもないだろう。

ここではウェーバーや意味学派の議論の意義は十分に認めつつ、さらに議論を深めていく必要がある。意味学派の議論は、社会が日々刻々作り出されていく関係であるということ強く印象付けるのに成功した。たしかにそれは社会について一面の真実だろう。現に社会は目に見えないものであり、手で触れることのできるものでもない。

しかし、社会は物質、モノではないということ、すぐにそれを単なる関係性や、「意味」だけに還元できるのかといえばそうではない。

現に関係性は生じては消えていく短期のものだけではなくて、継続的な関係もある。親子代々事業が継承される同族企業などは、世代を越えて関係がつながっており、関係こそが今後の人々の行動の原理になっていることすらある。世襲で受け継がれる君主や貴族ならば、関係はさらに広大で複雑で長期にわたるだろう。

しかも、それらの関係に付与されている「意味」は単に個人の主観だけの問題ではない。まさにここが意味学派の議論の弱点なのだが、仮に多くが人々の主観にすぎないとしても、それらの主観を一斉に改変することができるのかといえば、そうではない。どんなに非情な独裁者でも、人々の主観を一斉に変えることなどできない。

政治学がしばしば指摘するように、独裁政権というのは民主的な選挙で選ばれているという正当性の根拠が欠けているので、実は民主政権よりも民意に注意を払わざるをえない。選挙で示される民意という手続きがないので、一般の人々が考えていることを政権内に取り込むことが難しく、しかも強権的な手段をもっている独裁政権に対して直接に批判的なことをいう勢力もごく限られている。

そこには、人々の主観を越えた何らかの存在、ある種の「客観性」が生じているのではないのか。人々の主観では対処できない何かの存在があるならば、それに対処するべき方法を考えるべきだろう。人間の関係は、互いの間で自分たちには操作できない別次元の存在を生み出しているのではないのか。このように考えてくると、新たな存在の問題が登場してくる。

むしろ、重要なのは関係性や意味を介して生まれてくる社会的な存在が、独自の客観性をもっているということである。そして、人々の主観や

関係性とは別の「世界」を考えるべきなのではないのか。このことはむしろ多くの人々が日常的に感じていることと近いのではないだろうか。

### 3. 客観的な存在としての社会

社会は人々が作り出している世界3の存在であり、世界3の存在であるがゆえに人々が自由に操ることができない。ごく簡単なことである。しかし、従来、社会の問題はあたかも自然の問題と同じく技術的な問題であるとみなされる(実証主義)か、あるいは人々の内面や人々の相関性の問題であるとみなされてきた(意味学派)。これらの立場は、世界をなんとかして二つに分ける二分法で理解し、説明しようとしてきたので、本来異質である要素を無理やり同一視し、混同してきた。自然現象と社会現象は別であるし、人間の内面の問題と人間が実際行った行動の結果とは別である。

普通に考えれば何もいまさら強調するまでもないことなのだが、なぜか哲学や思想、社会科学を深く学ぶほど、人々は二分法の伝統を、現実よりも優先するようになってしまう。

多くの人々の考えでは、社会はある種の存在である。ある種のというのは、石ころや住宅や列車がそうであるのとは違う存在であるということである。どんな人に尋ねたところで、社会を直接見たことがある人はいない。社会はやはり目に見えないのである。目には見えないが、手では触れられないが、そもそも物体ではないが、それは存在する。まるでなぞなぞのような問いかけだが、社会という存在に肉薄していくためには、いろいろ形を変えて問い直す必要がある。

そもそも「社会は目に見えない」という自明の事実と、「社会は存在しない」という判断を同一視する必要はない。意味学派はしばしば「社会は関係である」と指摘し、それが安定した存在ではなくて、生じては消えていく動態(ダイナミックス)であるといった説明をしようとする。もちろん、社会にはそういう性質がある。しかし、話がぐどくなるが、「生じては消えていく動態」は、本当に存在ではないのか、それに客観性はないのかと問い直す必要はある。

さらにいえば、社会には客観的な存在としての性格はないのか。この問いは、「社会」という言葉を「現実」という言葉に取り換えて考えると理解しやすくなる。すなわち、「現実には客観的な存在としての性質はないのか」。もっと簡単にいえば、現実には客観性はないのか。これまた話が

繰り返しになってしまうが、多くの常識的な人々は、しばしば「客観的な現実」ということを口にする。

たとえば、「当人(たち)がどう考えようと、客観的な現実がそれを許さなかった」、あるいは「理想としては素晴らしいし、当人(たち)の善意は認めなければならないが、客観的な現実において実現するはずなどはじめからなかった」、「理想の世界に浸るのは悪いことではないが、その一方で客観的現実にも注意を払うべきである」「Aには、客観的現実がまるで見えていない」といった言い方は、日常的によく出会う。また、筆者も含めてよく口にする。

こういった言い方を、単にレトリックの問題とみなすこともできるだろう。擬人法ならぬ「擬物法」、つまり本来モノではないものをあたかもモノであるかのように語る修辞法であると考えられることもできるはずである。しかし、本当にそうだろうか。「客観的な現実」というのは本当に単なるレトリックであって、実在しないのか。筆者にはそうではないように思われる。やはり個人や集団が自分たちの意のままにすることができない客観的な現実、客観的な社会は実在するのではないだろうか。またそう考えなければ様々な困難が生じるのではないのか。さらにいえば、先に「ジレンマ」「パラドックス」「矛盾」と呼びならわされてきたものの多くが、社会の客観性を認めないために生じているのではないのか。つまり、本来人間の主観によって意のままにすることなどできないはずの問題を、あたかもそれが可能であるかのように論じることで、「ジレンマ」や「パラドックス」「矛盾」を自ら作り出しているのではないのか。

そして、人間の主観(世界2)と人間が作り出した社会(世界3)を区別するならば、それらは「ジレンマ」でも「パラドックス」でも「矛盾」でもなくて、元来別の問題、両立させようとする事自体が間違っていたにすぎないと考えうるのではないだろうか。

つまり、三世界論で考えるならば、従来の二分法(実証主義、意味学派)が陥っていた困難を、そもそも「困難」として認識する必要がなくなるのである。

そして、もう少し子細に考えていくなれば、人がふだん「社会」と呼んでいるものには、二つの側面を区別する必要がある。一つは、人々が自らの内面で自由に思い描いている社会である。確かにこれは世界2の存在として、個人の自由になる。何を考えようと自由であり、どんな社会を空想

しようと誰も妨げることはない。

さらにいえば、意味学派はこの意味での社会を、それ以外の社会にまで無理やり拡大して考えてきたともいえる。つまり個人の内面で思い描かれる社会と、他者との関係で生じている社会的関係を混同しているのである。

そして、もう一つの社会とは、本来社会科学の対象とされるべき「社会」である。この意味での社会は人々の関係、個人と集団の関係、集団と集団の関係、さらには制度、慣習、法律といった形で抽象化され固定化された関係も含まれる。

ここまで考えてくると、意味学派の議論がしばしば実証主義の側から批判される論点もわかりやすくなる。最もわかりやすい例は、法律である。意味学派の手法で法律を論じようとする、法律は過去の人々の相互主観の産物であり、過去のある時点での人間関係、社会関係を表現しているにすぎない。しかし、法律家や多くの法学者がこんな説明を受け入れるだろうか。法にかかわる人々にとって法律というのは、客観的な存在であるからこそ意義がある。

個人が意のままに変更できないからこそ、自由にできないからこそ法律は公平なのである。どこかの専制君主がうそぶいて「私が法律だ！」と宣言すれば、法律も世界2の存在であるといえるかもしれないが、多くの法律家はその種の想像力の遊びに付き合ってくれそうにないだろう。確かに法律は世界3の存在だからである。

しかし、法律だけが世界3に属しているわけではなくて、社会科学が論じる「社会」というのは世界3に属していると考えべきだろう。社会は個人の意のままにならないからこそそこに実在しており、客観性をもちうる。人々の主観に左右されない基準や根拠が、たとえ不確実な形であるにせよ、存在しなければ人々は生きていくことが困難なのではないだろうか。無根拠、無基準の生き方、それは思考実験としては可能だろう。

しかし、問題は知識人が自分の主観（世界2）でもてあそぶ思考実験ではなくて、無数の人々の日常にある。人間は決して誰もが思考実験で暮らしているわけではない。多くの人々は、毎日を客観的な存在である社会が可能にする条件を生かしながらなんとか生活しているというのが実情なのではないだろうか。

多くの場合、社会というのは自分たちで作り出すものというよりも、そこにはじめからあって、一方的に要求してくる存在なのではないだろう

か。もちろん、一部の人間は多くの関係を作り出すことが可能であり、ほとんど一方的であると思われる人物もいるだろう。有力者、有名人、権力者と呼ばれる人々である。しかし、そういう人物は少数であるからこそ有力であり有名であり、権力をもっている。

そして、多くの人々は狭い範囲の人間関係を作り出しては解消しながら、もっと広大な社会の与える条件に適合して生きている。たとえば、就職活動をする大学生を考えてみればよい。彼らが自ら起業して成功し、会社を成長させ、短い間に大きな影響力をふるうようになる可能性はゼロではない。アメリカのシリコンバレーの自宅ガレージで創業して成功し、短期間で億万長者になったといった人物は、今でも尊敬されている。しかし、そういう人物は少ないからこそ有名になり、名声を享受できる。

大半の学生は、既存の企業に就職する。就職した企業ではすでに多くの規則や人間関係が存在しており、企業文化と呼ばれるものも行きわたっている。大学を卒業したばかりの新入社員が会社を形作っている関係性を自由に操作できるのかといえば、難しい。ある種の特別な資質——カリスマ——を持った新入社員が会社全体を巻き込んで一変させるという事態は、ドラマや文学作品としては面白いが、客観的な現実としては考えにくい。

ほとんどの若者は、そんなことは一度も考えることなく就職した会社の秩序に同化しようとするだろう。この意味で「会社」は、そして社会は客観的に存在しているのである。しかも、就職した会社の中で昇進すればするほど自由になるのかといえば、実は逆で、「責任」と呼ばれる人間関係が急増していく。

まさに「責任」とは社会そのものである。たとえば、責任をあくまでも主観的なもので、個人の内面にあって自由に操作できると考えるならば、どうだろうか。多くの人々と約束したことについて、そんなことは主観の問題だから反故にしてもかまわないという態度をとるならばどうだろうか。他人との約束を、すべて自己の内面で解消するという人物である。その人物に頼まれて金を貸しても、当人は自分の内面で借金をすぐに解消してしまう。次に会ったときには借金を完全に忘れていたわけである。

確かにこういう人物は究極的に自由なのかもしれないが、社会生活を送ることは難しいだろう。社会生活についていろいろ論じる以前に、近くにおいてほしくない種類の人物である。金の貸し借りはわかりやすい例だが、もちろん社会生活にはもっと微妙で不鮮明な関係が無数に蓄積している。

知人に朝すれ違って挨拶をするか無視するかといった瞬時の関係ですら、長く記憶され「あいつは挨拶もしない！」という理解が保持される。しかも、それらのちょっとした間違いですら、しばしば回復不可能であり、関係を修復するには長い時間を要する。

ようするに日常のごく些細な関係ですら、長く保存され、しかも自由に操作できないのである。まさにこれこそが客観的な存在としての社会なのである。

客観的な存在としての社会という捉え方は、もちろん実証主義の社会科学と親和性がある。実証主義は、「社会」がそこに実在するという考え（仮定）に出発しており、詳細な研究を積み重ねていけば社会についての真実が明らかになると考える。個人や小さな集団が勝手なことを考えても「客観的な現実」は動かせない。だから動かない現実や不変の社会を明らかにするというわけである。ただし、実証主義の弱点はすでに意味学派が長年批判してきたように、自然現象と社会現象を同一視するか、混同していることにあった。本稿での表現に変えていえば、実証主義は世界1に属する自然現象を研究する方法で、世界3に属する社会現象を研究しようとしてきたのである。

これもまた人々が日常に感じている現実感と離れている。人間が地球上に登場する以前からある自然現象と、人間が意図をもって作り出している人工物とは当然違うはずであり、野生動物が相互に作り出している「社会」と人間の社会も違うと考える方が実感に近いだろう。

#### 4. ポストモダン理論再考

20世紀の思想は、19世紀から支配的な地位を占めてきた実証主義に対して、様々な立場の意味学派が挑戦し続けた過程であったともみなすことができる。世界1と世界3を混同する実証主義がいかに人々の現実感からかけ離れているのかという議論もその一環である。しかし、20世紀に大活躍した意味学派の議論も、世界2と世界3を混同しているというのが本稿の主張であった。

20世紀、とくに20世紀後半の思想界で大いに脚光を浴びてはやされた思想運動に「ポストモダン」がある。もちろんポストモダンとは何かという問い自体が困難をはらんでおり、簡単にひとくりにできない多様性をもっていることはいうまでもない。しかし、皮相な理解という批判



を恐れずにまとめるならば、ポストモダン思想の根幹には、意味学派の思想があった。

つまり「モダン(近代)」とは、実証主義に代表される思想が大々的に展開した時代であり、運動でもあった。それが挫折して、困難に突き当たる。近代は行き詰まり、その後(ポスト)の世界がやってくる。その際に用いられた方法が、「意味」をめぐる哲学諸派の方法論であった。つまり社会には客観性はなく、あくまでも人々の主観、とりわけ「わたし」の主観の問題でしかない。そして、現実が発見するものや究明するものではなく、作り出すものであると考える。

20世紀には、この種の議論が既存の権威や権力の問題を明らかにする批判的な議論として盛んにおこなわれたこともあった。人々を世界大戦に駆り立てた国家権力は、実は永遠不変の存在ではなく、不動の権威でもなく、しょせんは一時的に共有される価値観、教育や報道を舞台とした宣伝(プロパガンダ)の産物でしかないといった議論である。そして、すべては「作られている」と暴露され、その無根拠が次々に明らかとなった。

しかし、この種の議論には諸刃の剣の性格がある。話は簡単で、既存の権力を批判する人々の依拠する人権や平和といった概念も、やはり根拠がないということになってしまうからである。そもそも特定の体制を「無根拠」として拒否し、それに代わる理想の社会を構想したところで、意味学派の方法でそれを根拠づけることはできないからである。そして、攻守所を変えながら批判を繰り返し、暴露を繰り返すうちに、あらゆる議論が無根拠であるといった、虚無主義(ニヒリズム)や、虚無主義風の冷笑主義(シニシズム)が次第に行きわたってしまった。

まさにこれがポストモダンの帰結であった。社会の問題ははじめてから根拠などない主観なのだから、まじめに研究する必要はなく、むしろ多くの人々を巻き込んで自分たちに都合な「現実」「現実感」を作ってしまう方がはるかに賢いということになる。そして、対立する人々が別の「現実」を無理やり作ろうとするのならば、どんな手を使ってでもそれを妨害する。

そこでは、どのような立場の人にも共通した真理や、誰もが守らなければならない倫理といった考えは後退するか、無視されている。「科学」に対する良心や信念がまだ共通されていた実証主義者たちとは異なり、ポストモダンの立場に立つ人々は、「科学」や「良心」や「信念」そのものが

いくらでも作り出せると考えてしまう。そして、敵はどんな無茶な宣伝でも仕掛けてくるのだから、自分たちも先手を打ってもっと無茶な言いがかりをつけなければ負けてしまう。敵はどんなひどいことでも平気でしてくるのだから、自分たちも対抗してひどいことをしなければならぬ。

それは知の世界に移行した権力闘争であり、知の政治化そのものともいえる。政治は味方と敵を常に特定し、味方を全肯定、敵を全否定という形で取り扱おうとする。それは古典的な科学観では、科学、学問の態度ではなかったのだが、ポストモダン思想にあつては政治と学問の境界線が取り払われる。すべては無根拠で、すべては作られている、捏造されているのだから、敵と味方の区別だけが根拠になってしまう。そこでは味方だけが根拠であり、味方の作り出したものだけが正しいということになってしまう。

長らく科学観の中心にあった実証主義を徹底的に批判した結果、何が「科学」であるのか、何が「真理」の根拠なのかということ自体が、特定の党派が恣意的に作り出した作品であるという考えに行きついてしまう。

理論というものには、それをを用いる人々の意図とは別に、それが持っている論理的な性格があり、論理的な性質を延長していくと、当初それをを用いていた人々の意図とは似ても似つかない議論に変貌していく。実証主義は、元来科学に対する信頼や誇りに基づいていて、その成果を人間の社会生活にも当てはめるならば、自然科学が成し遂げた成果に匹敵する成果を社会科学でもあげられるに違いないと考えられていた。また、今でも多くの人々がそう信じている。

しかしその種の「科学」の中には、人間の組織をあたかも巨大な機械のように見なしており、人間を機械の部品のようにとらえる発想が生じてくる。機械の部品は故障すれば取り換えられるべきであり、人間も同じく劣化して「機能」を果たせなくなると、すぐに別の人間に交換される。部品は当然工業製品として均質でなければならないから、人間も均質化されるのが望ましいということになる。

実証主義系の議論の特性は、すでに再三批判されてきたように、人間を道具化、部品化するという副作用を伴っていた。自然現象と人間を区別できないのだから、両者は同じように扱われざるをえない。そして、この点を意味学派の人々が「人間の道具化」といった議論で批判してきたのである。実証主義が想定する機械論の結果、人間が自らの議論によってますます

す機械（部品、奴隷）化されてしまう。

それはまさに再帰性や自己言及性である。人間は社会や他人との関係性について、自分自身について言及する以外に考えることができないからである。社会にあって互いにやり取りしている人々は、同時に自分自身でもある。社会をめぐる議論は、自らも社会の一員である本人自身に再帰する。そして、実証主義を受け入れるということは、同時に自分自身もまた単なる自然現象であることを承認することである。

そして、「自然現象としての自己」を拒否する人々が、「意味」を重視する意味学派的立場から実証主義を批判したのは、自然なことであった。人間にとって、自己は「自然」から区別するべきだからである。自己が自然界と同じならば、自己の存在はない。人間が独自に何もしていないならば、本人にとって存在もしていないのと同じだからである。

ポストモダンの議論は「自己」を解放することによって、同時に二つのことを実現した。一つは、自己の自由である。それはまさに近代主義（モダニズム）が最重視した自由の理念である。自己、個人は自由であり、何ものにも従属してはならない。しかし、自由の理念は同時にもう一つの帰結をもたらす。それは無数に存在し、互いに自分勝手に、無秩序をもたらす自己である。

互いに対等に「自由」を実現するのならば、他者の自由を妨げることはできない。自分が自由でありたいように、他者も自由でありたいからである。そして、自分が自由でありたい権利を侵されないように、他者も自由でありたいという権利を侵されてはいけない。

そして、これらの主張（理論）が循環し続けた結果、誰もが認めざるをえない根拠は失われてしまった。いうならば多神教的な状況で、様々な神々が闘争を繰り返す、互いに妥協を重ねることで「現実」が刻々作り出されていく。筆者自身も長く親しんできた意味学派的な世界観がこれである。

もちろん、そこには極端な相対主義から、虚無主義に向かう可能性も論理的に含まれていたのである。

## 5. 世界3と客観的な社会

社会学には「社会名目論」という概念が古くからある。社会というのは存在ではなくて、あくまでも名称であり、概念であるにすぎないという考

え方である。哲学の歴史をたどれば古代ギリシア、中世神学にまで起源をたどる唯名論と実在論の対立まで至る。そして、議論の内容もほぼ哲学史でおなじみである。

本稿で論じてきた議論でいえば、社会実在論は実証主義に受け継がれ、社会名目論の立場は意味学派の様々な立場に対応する。しかし、すでに論じてきたように、これら二つの立場は両方とも二分法の世界観という点では共通しており、世界を自分たちで考えた二分法で説明しようとしてきた。

これに対して、自然と人工物、人間の内面と人間が作り出したものをそれぞれ別の区分に分けて考える立場、つまり世界を三つに分ける三世界論で考えるならば、事態は大きく変わることになる。

そして、漠然と「社会」という名前と呼ばれているものを、人々の内面と人々が相互に作り出している社会とに分けて考えるならば、客観的な社会を実証主義とは全く異なった形でとらえることができるのではないだろうか。

つまり、人々が相互で作り出してしまった以上、人々の主観では自由にできない社会の存在に客観性を問い直すことである。意味学派は人々の内面（世界2）と社会（世界3）を同一視することによって、社会をすべて主観の思いのままになる関係であると考えた。しかし、現実を生きる人間にとって社会は自分の思い通りにならないことばかりである。そういう場合、人は自分よりもより多くの権限を持っている人や金を持っている人が、自分よりもより意のままに、より自由にふるまうことができると想像しがちである。平社員よりも社長の方が自由であると想像するわけである。しかし、実際には地位が上がり権力が集中すればするほど意のままにふるまえる領域は狭くなってしまふ。

むしろ昔の歴史学や文学が考えてきたのと現実とは逆であるというのが、社会学が明らかにしたことであった。「社会」は個人の外部にあって、個人を強く規制する。近代ヨーロッパ人が夢見たような「自由な個人」などというのは、現実ではなく、むしろ現実の正反対の夢想でしかなかった。近代化は分業の進行と、組織の拡大であり、分業や組織に参加する個人はますます断片化し、複雑な関係性に埋め込まれていく。むしろ、人々は現実の自分が不自由になればなるほど、理念や思想の世界で「自由な個人」を夢見るようになったのではないだろうか。

もしもそうならば、近代ヨーロッパ起源の社会科学というのは失われた

自由への追憶だったのではないのか。つまり、現実には複雑に関係づけられた不自由な人々、過去の時代に貧困や飢餓や暴力の代償として確保していた自由を放棄した人々の、懐古だったのではないのか。

それは「自由からの逃走」などではなくて、自ら放り出した自由への追慕だったのではないのか。すなわち以前には進んで投げ捨てていたのだが、失ってみてはじめてその重要さを思い知らされる。しかし、すでに手遅れで回復することはできない。

世界2において放り出した「自由」は、世界3にあっては回復できない現実となる。当人たちはもしかすると、世界2と世界3を区別することができないために、「自由」は今すぐにでも自由に回復できると考えていたのかもしれない。しかし、世界2と世界3は厳然と別の世界であって、いったん世界3(社会)の事象になってしまった社会的関係を世界2(主観)に戻すことはできない。

人間の社会にあって、世界2と世界3の関係は不変で、たとえばある最高権力者が戦争の開始を世界2において決断して、それを世界3において実現したならば、戦争をなかったことにすることができるだろうか。すでに大勢の兵士が命を失った後で、開戦以前の状態に勝手に戻すことができるだろうか。

古代や中世の小規模な武装集団の問題ならば、あるいはそんなことが可能かもしれない。数名の戦闘員の死は悲しいことだが、関係者に十二分の保証を行い、釈明を受け入れられた上で、原状復帰も可能かもしれない。しかし、はるかに複雑化し、大規模化した近代の国家にあってそんなことは絶対にありえない。

しかも、問題は権限が集中すればするほど複雑化する。社会学という学問が近代になってはじめて成立したのは偶然ではない。小集団が多く为社会問題を左右していた時代が終わり、はるかに大規模で複雑な集団や組織が社会の主人公となった以上、そこに生きる人々は自分たちが作り出しているはるかに複雑な関係と、いやでも直面させられる。そして人はどんな条件の下でも何とか生きていかなければならない。

人々を取り巻く状況の多くは自分の意のままにならないことばかりであり、富を蓄え、地位が上がりれば少しでも意のままにできるのかと考えていたら、実は正反対である。そんな経験が多くの人々に共有されるようになると、自分たちの前に立ちはだかり、自分たちの上ののしかかる巨大な存

在を何とか言語化しようということが始まった。

そうして発明されたのが「社会」という便利な概念であった。自分の好き勝手に生きたくても、それは「社会」が許さない。嫌いな人間や腹が立つ集団を気のすむまで痛めつけてやりたいが、逆に親族や気が合う仲間をもっと優遇したいが、そんなことは「社会」的に許されない。もちろん、「社会」の力をなんとか免れる方法や、むしろ「社会」を利用して私利私欲を満たし、敵を苦しめるといった方法も無数に生まれる。むしろ、「社会」があるからこそそれらは巧妙化し、長期化することで多くの弊害をもたらすし、正されることも難しい。

近代ヨーロッパが信じた「自由な個人」の前に立ちはだかる「社会」という現実に、多くの人々は戸惑い、それを正体不明であるが間違いなくそこに存在する実在であると考えようになったのである。何もかも自由な個人（主体）によって作り出されるという信念が後退し、「社会」という自由にならない存在が意識されるようになった。

19世紀後半、草創期の社会学の課題が人間の意図とは別に存在する実在としての社会や有機体としての社会であったことは、ごく自然なことであったといえる。先にも触れた「社会実在論」の系譜であり、社会名目論の流れに属する立場（意味学派）から様々な批判を浴びてきたのもすでに強調したとおりである。

しかし、社会を世界3に属する客観的な存在として捉えなおすならば、古臭い議論として放置されてきた社会実在論の考えをもう一度評価しなおすことができるのではないだろうか。むしろ、多くの人々が日常的に実感している「社会」を再度客観的存在として捉えなおす方が、有意義なのではないだろうか。意味学派の流儀に従って、様々な概念を細かく定義し続けたり、抽象化された関係性の離合集散を傍観し続けたりするといった作業は、すでに極端なところまで行きついており、また極端な議論を続ければ続けるほど多くの人々の現実感からますます離れて行ってしまうように思われる。

意味学派的に言えば、研究者内部で循環する現実感が、一般の人々の社会観から次第に遊離して行ってしまうのである。

それでは、どうやって社会は客観的であるのか。まさに本稿の中心問題がこれである。ただし、ここで言葉をたくさん用いた「概念」を新造してしまったのでは、意味学派が百年以上やってきたのと同じことになってし

まう。

むしろ、大切なのは過去の人々が行ってきた知的探求に学ぶことである。もっと具体的にいうならば、「学問」や「科学」、「法律」「制度」、そして「集団」や「組織」といった古くからの一般的な概念は、世界3の客観的存在をなんとかして客観化しようとする努力の成果であったと考えるべきなのである。

実証主義者は「学問」や「法律」そして、「社会」を自然現象と境目のない一体の現象と考えようとした。意味学派はそれらを自己(たち)の内面の問題と同一視しようとした。しかし、実際には世界3に属する「学問」「法律」や「社会」は、人々が生み出した客観的な存在であるからこそ、個人の自由にはできないし、自己(たち)の内面から独立して「客観的」でありうるのである。

客観的な存在としての社会は、人々の意図とは別に、主観とは別に、確かに存在する。ただし、ひどく複雑な形で成り立っているために、簡素な図式(モデル)で表現することは難しい。しかもモデル化しようとする、そのモデルを人々が学習し、知ることによって社会そのものに影響を与えてしまう。人間は他の人々の行動を常に観察しており、他者を観察する中で、それを自己に当てはめて理解する。そして、自分ならばどうするかということを常に考えている。そして、他の人々よりもより有利に立ち回ろうとする。他の集団よりもより被害を少なく、より利益を多くなるよう行動しようとする。その結果、モデルは急速に無効化していく。モデルはそれが重要であればあるほど、有意義であればあるほど急速に意義を失っていく。理由は簡単で、なにか画期的に有効な方策があるならば、誰もが我先にそれを利用しようとするからである。そして、次々と利用されるごとにモデルは現実を変えていき、結果としてモデルとは異なる現実が生まれてくる。

## 6. 新しい客観性の社会学

本稿では、社会学理論の行き詰まり状況を、カール・ポパーの三世界論を手掛かりにして、社会学創始期の議論からポストモダン理論の問題点についてごく簡単に触れてきた。簡単にいえば、社会学創始期にすでにみられた実証主義(社会存在論)と解釈主義(意味学派の源流、社会名目論)の対立以来の議論がほぼ出尽くし、対立が相撃ち状態になって長く停滞状態

に陥っている。自然科学の方法で社会を研究することにはかなり無理があるが、かといって解釈主義や主観主義を推し進めていくと虚無主義や極端な相対主義、さらには倫理的な危機におちいりかねない。

そして、それらの困難よりももっと困るのは、理論的な議論が一般の人々の現実感から遊離していくことにより、理論そのものが不要物であるとみなされ、信用を失っていくことである。これこそが社会学だけにとどまらず、社会科学全般における理論の衰退である。難しいことをいう連中が長年よくわからない思弁に耽っているが、現実の社会はもっと別の次元で着実に動いているし、また現実の困難を理論家は何も解決できないではないかというわけである。思弁に浸るよりも、いまここにある現実問題を、手堅い(使い慣れた)方法で緻密に明らかにし、確実な知識や情報を蓄積していくことこそが社会科学の着実な進歩なのだという信念がますます強化される。

言い換えると、理論の問題はすでに完了しており、今後は現場(フィールド)で確実な知識を積み重ねることこそが重要なのだという考えである。そこでは、理論の役割である既存の視点や方法を問い直すという意図は放棄される。はたしてそれでよいのだろうか。本当に理論は完了したのだろうか。

理論の探求にとって不利な状況はそろっていた。それは、私見では、すでに古代から受け継がれてきた二分法・二元論が可能性を掘り尽くしてしまった状況でしかない。議論が込み入って用語が難しくなる一方で、基本となる発想は変わらない。これでは鋭い洞察力をもった人々の要求を満たすことはできない。難しい言葉遣いだが、結局同じようなことを繰り返しているだけだと見破られてしまうからである。多くの人はそんな堂々巡りに付き合っているほど暇ではない。現に、今までの理論は本稿で論じてきた二重の混同のために社会の現実に対面する人々の役に立つというよりも、むしろ混乱をもたらしてきてしまったのである。

本稿の代案は、ひどく簡単で、従来の二分法、二元論を、三分法あるいは三元論取り換えるというだけである。実証主義者に対しては、世界1の自然界と世界3の社会を区別すること、意味学派に対しては、世界2の主観的世界と世界3の客観的世界を区別することである。そして、両者に対しては、社会は人間が作り出した世界3の存在であり、人間が作り出したがゆえに人間の主観では自由にならないと主張することである。



社会は世界1の自然現象のような客観性とは別の客観性をもっている。しかも、そのことはすでに社会科学者たちが長年行ってきた研究においてすでに明らかになっていたのである。ただし、これまでの社会科学は実証主義にせよ、意味学派にせよ、共通して二分法・二元論の思考にとらわれていたために問題を混同してしまい、「社会」の問題を自然科学、あるいは解釈主義や心理主義ですべて論じうろと考えてしまったのである。

社会学理論の行き詰まりを打開していくには、本稿で論じた世界3としての社会という社会像だけではなく、社会学以外の領域の経験に学んでいく必要もある。社会は意味学派の極端な立場の人たちが信じているように単なる幻想で、実在していないとみなすこともできるが、法律学が法律を、経済学が経済を考えるように客観的な実在と考えることもできる。

むしろ、課題は難しいものではない。多くの人々が自明の事実と考えていることを、哲学や文学に由来する難解な概念や用語で否定的にとらえるよりも、理解できることとできないことを誠実に区別するべきであろう。自分（たち）で勝手に作り出した矛盾に向かって「矛盾だ」「パラドックスだ」と嘆息するよりも、それらをもう一度見直して区別して考えるべきである。

そうすれば、社会学理論を主に世界3を対象とした理論として、世界1や世界2との境界線問題に集中することで、真剣に考えることが問題の解決につながることに、そうではないことを区別することができるようになる。抽象的な言い方になるが、世界3の問題を世界1や世界2の問題として論じることは、最初から解決できないことがわかっている問題を自らに課すことでしかない。株式市場にニュートン物理学のような法則を発見しようとすることや、会社組織や国家権力、法秩序を指して実在しない共同の幻想だと主張することは、まさに混同によって生じている。

逆に、それらを区別するならば、人間にできることとできないことが明らかになる。技術の問題で解決できることは技術の開発改良に全力を注ぐべきであり、人々の相互性や反照性、自己言及性の問題は、技術ではなくて社会科学の問題なのである。そして、このことから社会科学の問題の難しさが、自然科学の難しさと全く別物であることが明確に説明できる。

そして、この問題は古くから人々を混乱させてきた「自由」という概念の問題に別様の理解をもたらす。世界3に属する社会の問題は、特定の個人にとって自由にできないからこそ人間全般の自由を確保しているのであ

る。同じような例で恐縮だが、世界のあらゆる市場を支配できる万能投資家がいる、世界の市場動向はすべてこの人物の意のままであるとする。そんな市場に誰が投資しようとするだろうか。最初から八百長、出来レースであることが明らかな競馬の馬券を誰が買うのか。

世界3はまさに人間が作り出しているからこそ、誰もが他人に自由にされたくないのである。そして、人々が熱心に関与すればするほど他人は自由にできないように努める。他人に自由にされないということは、自分が自由であることでもあるが、自由というのはあくまでも他者との関係でしかない。

いわゆる「自由論」をめぐる議論をここで展開するのが本稿の課題ではないが、三世界論をふまえない自由論が陥ってきた自己矛盾について注意を促す意義はあるだろう。多くの自由論は、世界2の自由を世界3に無理やり広げようとして、それが困難であることに気づいて「ジレンマ」や「パラドックス」や「疎外」を強調してきた。あるいは、「自由」が存在しない世界1の論理をそのまま世界3にあてはめて、すべてはあらかじめ定まった法則に従っているといった主張をしてきた。いわゆる「社会ダーウィニズム」と呼ばれた一連の思想も、自然界(世界1)における「適者生存」の法則を、そのまま人間社会(世界3)の秩序形成に当てはめようとしたわけである<sup>4)</sup>。しかし、両方とも勝手に作り出した前提となる約束事が矛盾に陥っているだけであって、問題は前提にあったことは、もうこれ以上繰り返す必要はないだろう。

最近の事例でいえば、2020年に大勢の死者を出した新型コロナウイルス禍に直面したアメリカの報道が「真珠湾以来！」を連呼していたのは、世界1と世界3を区別しない思考の在り方をあからさまに示している。真珠湾攻撃を行った人々は「ウイルス」なのか。この種の混同に対して素朴な違和感を感じる人は少なくないだろう。しかし、違和感を学問的、理論的に表現することはなかなか難しい。現に、実証主義は世界1と世界3を区別しないので、「真珠湾」と「ウイルス」を区別するためには実証主義以外の理論が必要なのである。

この区別に関してもうこれ以上論じる必要はない。しかし、本来区別すべき問題を意図的にせよ無意識的にせよ、混同したことによってもたらされた混乱や無用な努力に、異なった視点からの想像力を働かせることは決して無駄なことではないはずである。

注

- 1) 筆者は、しばしば指摘される社会学理論の行き詰まりというのは、そもそも論者たちが自分で勝手に作り出した不自然な約束事を無理やり守り通そうとすることによって生じている、いうならば自作自演なのではないか？という議論を拙著で行った。そこで問題にしたのは「方法論的個人主義」、何もかも問題を「個人」、とりわけ「自由な個人」に終始しようとする思考である。簡単にいえば、「自由な個人」というのはそもそも存在として自己矛盾である。その後、「自由な個人」に終始する理論が独特の修辞法（レトリック）を発展させてきたことを強く意識するようになり、「社会修辞学」という名前を付けて研究することを考えるようになった。犬飼2011, 犬飼2018
- 2) 社会学にとって意味学派的議論の在り方を理解するには、現象学哲学者カール・レーヴィットの次の一文を読めば十分だろう。

「通りに出て、ひとびとのあいだに赴くとき、私は、私たちとひとしい者たちの世界という自明なしかたで他者たちと出会う。そのかぎりでは他者たちは、けっして「他なるものたち」として出会われるわけではない。共同世界という場合の「共に」にさしあたりふくまれる、とはいえ明示的でない意味は、したがって、私とひとしい者という意識で共に在る人間ということである。他者が他者であることが明示的となるのは、私が私自身を意識して、（私以外の）すべての他者がたんに共に在る-人間となるかぎりにおいてである。あるいは他者たちが、それ自身において類的に他の種のもの（人類、文化共同体等々）である場合にかぎられる。」（Löwith 1928=2008: 130）

和辻哲郎にも大きな影響を与えたといわれるレーヴィットの議論は、和辻の議論とともに、まさに意味学派的人間観、社会観を典型的な形で示している。「人・間（じんかん）」に生じる関係こそが「人間（にんげん）」であり、同時に社会（共同世界）でもある。現象学社会学はまさにこの一点から展開しており、人々が「いま・ここで」実感している関係性の至上の「意味」を強調しようとする（関連して、福島1995）。

ただし、現象学の議論では、人々が「いま・ここで」実感する関係性とは別の、人々の主観では自由にできない社会の存在は把握することができない。むしろ、現象学は客観的な社会を意図的に無視しようとしているというべきだろう。客観的な社会についてその存在を認めてしまったならば、人々が「いま・ここで」作り出している関係性や関係性の意味が相対化されてし

まうからである。現象学は多くの場合、「いま・ここで」生じている意味の「至高性」を強調しようとするからである。私見では、まさにここにこそ哲学と社会学の分岐点がある。

筆者も現象学（意味学派）の議論に大きな「意味」を見出し、影響を受けてきたことを誇らしく認めるが、それらに限界があることも誠実に認めるべきであると考えようになっている。

- 3) 筆者は、和辻哲郎の「人間（じんかん）」の思想をめぐって議論を積み重ねてきた。犬飼 2016。
- 4) ようするに、ガラパゴス・ゾウガメはダーウィンの議論から直接影響を受けることがないが、人間の社会では「社会ダーウィニズム」自体が世界3に属する社会的存在として大きな影響を与えてしまう。「社会ダーウィン主義」の問題をめぐる様々な論点については、下記の拙稿を参照されたい。社会科学をめぐる理論考察の流れの中で、次第に悪評を受けるようになった「ダーウィン主義」について、あえてこれを擁護しようとする思想家フリードリヒ・ハイエクは、ダーウィンの思想の根幹が、「弱肉強食」の没倫理性にあるのではなく、むしろ誰も設計したわけではないのに生じる秩序、すなわち「自生的秩序 (spontaneous order)」の意義を強調した点にあるとした。このことは、ハイエクにもゆかりの深いポパーの「世界3」概念と合わせて考える場合、さらに多くの問題を提起しうるだろう。ただし、これ以上の検討は別の機会に譲りたい。犬飼 2018。

## 文 献

- Archer, Margaret S., 1995, *Realist Social Theory: The Morphogenetic Approach* (=佐藤春吉訳, 『实在論的社会理論 形態生成論アプローチ』, 青木書店, 2007年)
- 福島揚, 1995, 「和辻哲郎とカール・レーヴィット——二つの「人-間」存在論——」, 『比較思想研究』(比較思想学会), 第22号
- 犬飼裕一, 2011, 『方法論的個人主義の行方』, 勁草書房
- 犬飼裕一, 2016, 『和辻哲郎の社会学』, 八千代出版
- 犬飼裕一, 2018, 「おのずから生ずる秩序の語り方——フリードリヒ・ハイエクと社会学理論, そして社会修辞学——」, 『研究紀要』(日本大学文理学部人文科学研究所), 第96号
- 犬飼裕一, 2019, 「世界3と社会学——カール・R・ポパーと新しい社会像の可

能性——」『社会学論叢』（日本大学社会学会），第196号

犬飼裕一，2020，「AIと世界3 カール・ポパー三世界論による社会学の可能性」（日本大学文理学部人文科学研究所），第100号

Löwith, Karl, 1928, *Das Individuum in der Rolle des Mitmenschen*（熊野純彦訳『共同存在の現象学』，岩波文庫，2008年）

Weber, Max, 1904, Die 'Objektivität' sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis, (=富永祐治・立野保男・折原浩訳，『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』，岩波文庫，1998年）

